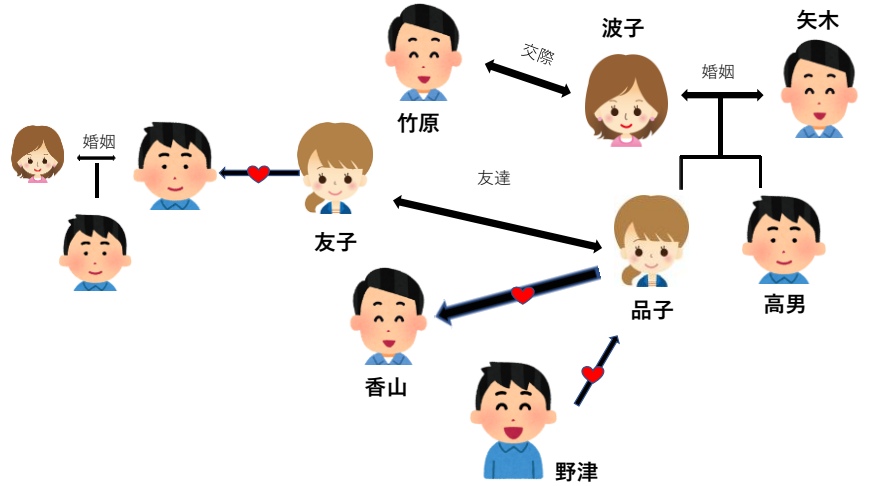


川端康成「舞姫」論 ～3人の舞姫を中心に～

1. 「舞姫」の梗概
2. 先行研究と疑問点
3. 戦前の舞姫：波子
4. 現在の犠牲：友子
5. 戦後の舞姫：品子
6. 川端の理想の舞姫像

文16-570 橋本こころ
(国語国文学専修 国文学コース)

「舞姫」の梗概



先行研究と論点と疑問点

- ・舞姫3人それぞれの舞踊への向き合い方
→川端の理想の舞姫像とは？
- ・無気力な登場人物
→品子(波子)の変化を考えると？
- ・愛と天秤にかけられた舞踊
→未来への希望・可能性が込められている？

日本の舞踊事情

華道や茶道に代わって、女の子の手習いになるほど流行
→大衆化・通俗化された舞踊、舞踊家の精神力の低さを批判
→波子のように本格的なバレエを一度も見たことがないままバレエを続けてきた戦前の舞踊家達への批判

戦後になって、西洋人から指導を受けた日本人によるバレエ公演が盛んに行われる
→戦前の舞踊家達に不安を感じていた川端が次に期待したのが、戦後の舞踊家達
→崔承喜の発表会や小牧バレエ団の公演に実際に足を運び、「独影自命」でも言及していることから、期待値の高さがうかがえる

戦前の舞姫：波子

- ・現在は舞台から離れてバレエ教師をしている
- ・プリマ時代が忘れられず、1人寝室でこっそりと「仏の手」を踊る
- ・結婚制度に縛られて嫌悪感を抱いている夫から離れられない
- ・一方で結婚前から交際のあった竹原と恋愛関係を続けている

- ・品子に「踊りましょう」と促された際に「踊ってみましょうか」と舞台復帰を決意
- ・矢木との離婚を決意
- ・竹原への想いを自覚し、認める

優柔不断な自分との決別
竹原への愛と舞踊の夢という幻想を抱ながら生きていく決意

優柔不断で弱気な性格
模索・懐疑・怯え

現在の犠牲：友子

- ・才能もあり美しく踊れたにも関わらず、友子の意識は波子品子への献身に向いていた
→友子の優しさは、やがて妻子のある男に向けられる
- ・男の子どもの療養費を稼ぐため、バレエをやめてストリップに転落する

「あの人の大事なものは、私の大事なもので、あの人の辛いことが、私の辛いことというのは、本当に高い真実でなくても、私1人が頼れる、真実になるのよ」
「私の自由を、愛する人に、さしあげてしまう自由」
→自分が報われなくても、愛した男のために尽くしたという事実だけを抱えて生きていく決意

道徳や理屈に捉われずに、自分の決断を貫く意志の強さ

戦後の舞姫：品子

- ・将来を期待されているバレリーナ
- ・大泉バレエ団の主な踊り手
- ・少女時代に慰問のために共に踊り歩いた香山を忘れられない
- ・波子と竹原の関係に反発しながらも静観している

- ・野津の好意を拒絶し、香山がいない寂しさに打ち勝とうとする
- ・波子と竹原の関係を認める
- ・香山を舞踊界へ連れ戻すべく伊豆旅立つ

友子の告白

- ・稽古場で「白鳥の湖」2幕を1人で踊る
- ・「品子が別れさせるわ」と波子に宣言
- ・「プロメテの火」
- ・舞台の火が自分の胸にも広がったように感じ、自分の香山への想いを自覚
→香山を孤独から救い出し、舞踊の世界へ連れ戻す

変化 → 決意

川端の理想の舞姫像

「純粹の肉體」

- 舞姫から溢れ出る情熱は舞踊には不可欠であり、溢れ出る情熱を自身の肉体で美しく表現できる
- 少女のような純粹さ
- +道徳や理屈に捉われない柔軟さ
- +情熱・強い意志

少女らしい純粹さで妻子のある男を愛し、周りの反対を押し切ってストリップへ身を落とした友子は「純粹の肉體」に1番近い人物

それまで少女らしい純粹さで反発していた波子の不倫を認め、香山への想いを強い意志で貫く決意をした品子
→「純粹の肉體」へ近づく
→未来の舞姫としての可能性